



カンブルランが語る 〈アッシジの聖フランチェスコ〉の秘密

恐怖を忘れ、乗り越えて、 喜びの感情へ

読響常任指揮者のシルヴァン・カンブルランは、メシアン^{めいそう}の歌劇〈アッシジの聖フランチェスコ〉を既に計24回も指揮した経験を誇る、この作品の権威です。現代音楽の研究者や愛好家で作る日本アルバン・ベルク協会が4月16日に行ったレクチャー（司会は音楽評論家の長本誠司氏）でも、傑作の魅力や聴きどころを熱心に解説しました。その模様をお伝えしましょう。（文責：事務局）

歌手もオーケストラも「語る」 瞑想的なオペラ

「読響と〈アッシジの聖フランチェスコ〉を共演することになった経緯は」

読響を本格的に指揮するようになって3〜4年たつうちに、このオーケストラとなら何でもできると思うようになりました。そこへ楽団側からオファーがあり、十分な練習時間が取れることなどを条件にOKを出しました。新たに読響とこの作品公演を作り上げるのは、大きな喜びです。初めて読響を

振った時に選んだのも同じメシアンの〈トゥランガリラ交響曲〉でした。〈アッシジ〜〉を共演できるほどに機が熟したのです。

「公演は演奏会形式ですが、舞台演出がある場合と、どんな違いがありますか」

お客さんには大きな違いでしょうが、演奏する側にはそれほど大きな差はありません。オペラには視覚的な要素が不可欠なものと、そうでないものがあります。〈アッシジ〜〉は演出がなくても十分に音楽だけでイメージで

きる作品です。オーケストラも歌手も共に語り、歌う構造になっているからです。また普通のオペラと違って瞑想的で、神やイエス・キリストの痛みを共感するところがストーリーの核。あまりオペラ的ではないオペラゆえ、演奏会形式でも真価を伝えられるのです。〈演奏会形式のメリットは大きそうですね〉

作品の細かい部分が、演出に気を取られずに、きれいに聴こえてきます。また、オーケストラの前に歌手を配置するので、歌の細かいニュアンスが会場に直接届きやすくなります。歌手も音楽により集中できますし。指揮者にとっては、演奏全体のバランスが取りやすくなる。合唱は楽譜を持って歌えるので、この難しく長大な作品の暗譜の苦労が少し楽になります。

「出演者には、この作品を初めて歌う歌手が多くいます。キャストिंगの狙いは」

次の新しい世代に歌ってもらいたい



天使役を務めるハンガリー人ソプラノ歌手のパラト。ヘンデルやバッハなどバロック音楽を得意とし、今回〈アッシジ〜〉に初挑戦する ©Zsofi Raffay

という気持ちから、初役とする歌手を選びました。作品を生かし続けるためには、新しい歌手に歌ってもらわねばなりません。

オーケストラの奏でる 音自体が劇に

「メシアンはどんなオペラを目指したのでしょうか」

メシアンが意識したのは神劇です。中世からのスタイルをイメージして書いたのだと思います。だから、世界初演となった1983年の舞台は作曲家自身の希望もあって、演劇性の薄いスタティックな作りでした。ただし演劇性は音楽そのものの中にあって、オーケストラが奏でる音自体が劇になっています。その意味では、ドビュッシーの歌劇〈ペレアスとメリザンド〉に通じるところがあり、一つ一つ言葉が聞き取れるように書かれています。ライトモチーフ（示導動機）もたくさんちりばめられていますが、ワーグナーのような使い方ではなく、むしろベルクの歌劇〈ヴォツェック〉と似ています。

「〈アッシジ〜〉の音楽面での聴きどころや焦点はどこにありますか」

メシアンの音楽は、時間の流れが特徴です。ものすごく速いところと、時間が止まったように遅いところが混在する。〈アッシジ〜〉では、前者は鳥

の声です。演奏すべき音符が山のようにあるパッセージが続き、こちらも指揮棒を忙しく振り続けられないといけない。後者では、永遠のような時の流れでテンポがゆっくりした部分が登場します。そこでは指揮者は、拍が消えてしまうような振り方をしないとけません。このどちらにも同じような高い集中力と緊張感が生まれてきます。昆虫の時間の流れ方と、星の世界での流れ方、両方が登場するとも言えます。

《作品の本質は、どう理解すればよいですか》

大きく三つの幕に分かれ、全体を通じて、恐怖を忘れ、乗り越えて、喜びの感情へ到達するための試練が語られます。この作品が世界初演された1983年は、世界中でAIDS（エイズ＝後天性免疫不全症候群）という病が大きく注目された時でした。フランチェスコは重い皮膚病患者にキスをして、恐れをひとつ、愛の力で初めて乗り越え、自由になっていきます。初演に触れた観客は、エイズをこれと比較できる恐ろしいものと感じたがゆえに、作品に強く共感できたのではないのでしょうか。

《天使も重要な役割を果たしますね》

天使は音楽でもって奇跡を起こします。フランチェスコは、天使の言葉である音楽を聴いて、天からの啓示を受けるわけです。音楽を通じて天使の言

葉を読み取るのです。巨大な編成のオーケストラには、20世紀初頭に生まれた電子楽器オンド・マルトノが3台必要です。第2幕では3台が同時に鳴り、合唱も加わる部分が出てきます。このオンドの音が天使の声のように聞こえ、分かる人には天の啓示として聴き取れるのです。

《この作品はメシアン^{メシアン}の創作上、終着点と言えるのでしょうか》

メシアンは長年オペラを書こうとしませんでした^{けいけん}でしたが、最終的に作るとなった時、敬虔なクリスチャンの彼はこの題材を選びました。メシアンは自分の作品に、いつも何らかの形で信仰を採り入れています。教会オルガニストを長く務めたこともあり、彼の信仰性が〈アッシジ〜〉にも大きく表れています。彼が蓄積してきた作曲技法や経験のひとつの集大成とは言えますが、それらがカタログのように出てくるわけではない。長い曲で編成も大きいので、代表作であることに違いはありませんが。

宗教を超えた 普遍的な精神性

《メシアン作品に濃厚なカトリシズムは、日本人にとって厄介な壁ですが、この音楽はもっと普遍的なものなのでしょうか》

カトリックを理解できないと、この手の音楽は理解できないと言われることがあります。私はそうは思いません。バッハの受難曲を聴く時は、聖書や宗教を知らなくても十分楽しむことができますし、モーツァルトの〈レクイエム〉やベートーヴェンの〈ミサ・ソレムニス〉にしても純粋に音楽として楽し

めます。それらとメシアンは、まったく同じ。メシアンの音楽は、宗教を超えた精神性を私たちに訴えてくる。特定の宗教と結びついていない普遍的な部分があると思います。

《それならば、メシアンはもっと身近に感じられることでしょうか》

メシアンが音楽を通じて常に私たちに伝えたかったのは、人間は自然界の一員であり、自然とは兄弟なんだ、という部分だったと思います。風や水や火も、すべて兄弟姉妹であると。恐怖を乗り越え喜びに至る行いは、人間なら誰も望むもの。それを手助けしてくれるのが自然であり、聖霊なのかもしれません。

ワーグナーの楽劇〈パルジファル〉にも儀式や宗教的題材が出てきますが、それらを超えて音楽として私たちに訴えてくるものがある。そうになると〈アッシジ〜〉には〈パルジファル〉に近い点があるのでは、と感じます。詰



2011年マドリード王立劇場での〈アッシジ〉公演より ©Javier de Real

まるところ、メシアンの音楽の根底にあるのは「弱さを持つすべての人への愛」に尽きます。いろんな形の喜びを音にしていた人なのです。

《マエストロが本作を指揮するたびに感じることはありますか》

もう24回もこの作品を指揮していますが、演奏が終わった後のお客さんの顔を見ると毎回、何か解き放たれたような、心が穏やかになったような表情で会場を後にしていくのが印象的です。メシアンの音楽には、どこか魔法的なところがある。そのマジックが何なのか、言葉では説明しにくいのですが、頭で理解しなくてもいいのではと思います。

正味4時間半という長さは決して長すぎません。この作品に必要な長さだと思います。何も考えず音楽に飛び込んで耳を解放して浸る、そうすれば時間が流れるのすら感じなくなります。

次回は11月号に掲載します